

サドにおける読者

——『閨房哲学』を通して¹⁾——

関 谷 一 彦

サドは読者をどのように意識していたのだろうか。サドにとって読者とはどのような存在であったのだろうか。どのような読者を想定し、その読者をどのようにとらえていたのかを考えることは、サドの文学を考える上でなかなか興味深い問題である。というのも、自らの欲望を至上としたサドにあって、読者を意識していたとは考えにくいからである。しかし、サドのテキストを読むと、「自らの欲望がすべてだ」と言う彼の主張とは裏腹に、サド自身が読者を強く意識しながらメッセージを発していたことは疑いえない。そもそも読者を意識しない作家など考えられるだろうか。文学作品を書こうとする作家は必ず「暗黙の読者」を想定しているだろうし、読者もまたテキストを読みながら「暗黙の作者」を創り出している²⁾。こうした作者と読者の関係について、最近の研究では18世紀フランスにおける関係の変質が指摘されている。変質そのものの指摘は決して新しいものではないかもしれないが、18世紀の「世論」や「公衆」についての研究がより詳細な当時の社会の変質を明らかにしている³⁾。こうし

- 1) 本論は2005年10月16日に新潟大学で行われた日本フランス語フランス文学会のワークショップ「サドにおける読者」の発表を基にしている。当日は真部清孝氏が『アリーヌとヴァルクールまたは哲学小説』を、宮本陽子氏が『ジュスティエヌ物語』を、関谷が『閨房哲学』を取り上げた。
- 2) 「暗黙の読者 *implied reader*」、「暗黙の作者 *implied author*」という表現は、「現実の読者 *real reader*」、「現実の作者 *real author*」と明確な区別を主張したウェイン・C・ブースの考え方に基づいている。Cf. Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction*, The University of Chicago Press, First Edition, 1961.
- 3) 「世論」については、Robert Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-*

た研究が明らかにしている変質とは、18世紀フランスの作家たちは以前にも増して「世論」や「公衆」、つまり読者を強く意識しながら書いているということである。また、シャルチエを旗手とした読書研究も大きな成果を残している。歴史学の領域では、これまでの読書研究はフランスでは蔵書目録の数量分析が主流であったのに対し、「書物の分布よりもその利用方法を、書物の所有よりもその読み方を考察しなければならない⁴⁾」とシャルチエは主張して、ハード面より「人はいかにテキストを読んだのか」というソフト面に切り込んだ功績は大きい。テキスト外の読書研究は歴史研究に譲ることにして、本論では18世紀の作家サドがどのように読者を意識していたのかをテキストの内側から考えてみようと思う。とりわけ「フランス人よ、共和主義者になりたければあと一息だ」という読者向けのメッセージを含むパンフレットが挿入されたサドの『閨房哲学』を通して、彼がどのように読者を意識していたのかを考えてみたいと思う。

本題に入る前に、二つの点について触れておかねばならない。一つは読者に関するロバート・ダーントンの研究、もう一つはサドの文学についての考え、そしてそこから読みとれる読者についての意識である。

ダーントンの「ルソーを読む」は、読者研究についてわれわれに一つの示唆を与えてくれる⁵⁾。彼は、ヌシャテル印刷協会（STN）に残されていた革命前に書かれた47通のジャン・ランソンの手紙を調べ尽くした。調査の目的は、ルソーの一読者であるラ・ロッシュェルの商人ランソンが、ルソーをどのように

Revolutionary France, W. W. Norton & Company, 1996. とりわけ第9章と第10章を参照のこと。また、「公衆」については、水林章『公衆の誕生、文学の出現—ルソーの経験と現在—』、みすず書房、2003. とりわけ「Ⅰ 公衆の誕生」を参照のこと。

- 4) ロジェ・シャルチエ、グリエルモ・カヴァッロ『読むことの歴史—ヨーロッパの読書史—』、田村毅他訳、大修館書店、2000、p. 391. また、シャルチエのこうした主張については以下に詳しい。ロジェ・シャルチエ編『書物から読書へ』、みすず書房、1992. とりわけ「序言」および「書物から読書へ」を参照のこと。
- 5) ロバート・ダーントン「ルソーを読む —18世紀の「平均的」読者像」、『書物から読書へ』、水林章・泉利明・露崎俊和訳、みすず書房、1992年、pp. 193-246.

読んだのかを調べるためである。これは非常に魅力的な研究で、「もしサドの『閨房哲学』を読んだ読者の内面が記録され、資料として残されていたら」、と思わず考えてしまうほどだ。しかしながら、これは気をそえられる問いではあるが、残念ながらわれわれはそういう資料は持ち合わせていないし、またこの誘惑には一つの危険も潜んでいるように思われる。というのも、ランソンがルソーをどのように読んだかは明らかになっても、それを「平均的な読者像」というには一人の読者の分析ではあまりにもリスクが大きいからだ。こうした資料の発掘は大きな意味をもつだろうが、やはりテキストに戻りながら作者がどのような読者を想定したかを考えるのがわれわれのとるべき方法ではないかと思われる。

もう一つの予備的考察は、サドの文学についての考え、そしてそこから読み取れる読者についての意識を検討することである。文学についてのサドの考えは、①『恋の罪』序文の「小説論」（出版は1800年）、②『文学的覚書』（1803末～1804年初め）③『『恋の罪』の作者、三文時評家ヴィルテルクに答える』などに見られる。「小説論」は公にされたもの、『文学的覚書』は公にする意図がみられないメモ書きであり、『『恋の罪』の作者、三文時評家ヴィルテルクに答える』は作家・批評家であるヴィルテルクの「悪徳に打ちのめされる美德」の作家という批評に対する反論であるが、サドの文学観、そして読者像を読み取ることができて面白い。これらから読み取れる読者についてのサドの考え方は、読者を楽しませながら教育する（『ドン・キホーテ』を高く評価）ことであり⁶⁾、読者には真実らしさ（真実である必要はない）を与える必要がある⁷⁾（ディドロの『リチャードソン頌』を思わせる）、登場人物と一体になるような錯覚を抱かせ⁸⁾（ルソーの『新エロイズ』を読むランソンを思い起こさせる）、最後のページまで読者の興味を維持しなければならない⁹⁾、というもの

6) *Idée sur les romans, Œuvres complètes du Marquis de Sade*, t. X, Société Nouvelle des Éditions Pauvert, 1988, p. 67.

7) *Ibid.*, p. 75.

8) *Ibid.*, p. 76.

9) *Idem.*

である。これらの点から分かるように、サドは当然のことながら創作上読者を強く意識していた。しかしまた、サドの読者についての考えは決して独創的というわけではないとも言える。問題は、二系列の中の公の作品では読者を意識した戦略は当然必要だが、公にすることを意図しなかった作品でも同じかどうか、そこがポイントになってくるだろう¹⁰⁾。

さて、こうした予備的考察を踏まえて、それでは『閨房哲学』のテキストを通して読み取れる読者とはどのようなものなのかを考えてみることにしよう。

Ⅰ.『閨房哲学』において読み取れる「暗黙の読者」

『閨房哲学』は7つの dialogues からなる戯曲形式の物語で、ドルマンセを筆頭とするリベルタンたちが、15歳のうぶな娘ウジェニーを理論と実践の教育を通して数時間でリベルタンに仕立て上げ、最後はウジェニーが自分の母親の性器や身体を針で縫合して本物のリベルタンに変身するというストーリーである。こうした筋をもつ『閨房哲学』においても、『恋の罪』や『アリーヌとヴァルクールまたは哲学小説』と同様に、サドは読者を強く意識しながら記述していると言える。では、それはいったいどういう点に読み取れるのだろうか。例えばそれは、1) 自分の欲望を論理を装った言語で説明したり、2) 世間の常識を批判しながら、実はそれは読者の常識を批判するところにみられる。それが、誰に対する説明か、誰への批判であるのかを考えるなら、その矛先が読者に向いていることがよく分かる。その一例として、サン・タンジュ夫人がウジェニーに「娼婦」について説明するくだりを見てみることにしよう。

10) 二系列とは、『ソダム120日』、『ジュリエット物語』、『閨房哲学』などの作品群と『恋の罪』、『アリーヌとヴァルクールまたは哲学小説』、『ガンジュ侯爵夫人』などの作品群を指す。しかし、こうした分類の根拠は匿名か否かで分けると、『アリーヌとヴァルクールまたは哲学小説』は匿名であるし、また3つの『ジュスティーン』はどのように分類すべきかなど、微妙な問題を含んでいる。この二系列の問題については、植田祐次のサド作『恋の罪』の「解説」に詳しい。Cf. 植田祐次「解説」、『恋の罪』、岩波文庫、1996。

この言葉〔娼婦という言葉〕はね、可愛いウジェニー、男たちの放蕩の公の犠牲者（*ces victimes publiques*）たちで、男たちの欲望や関心につねに身を任せることができる女たちのことよ。幸福で尊敬すべき人たちなんだけど、世論（*l'opinion*）は彼女たちを卑しめているわ。でも彼女たちは快樂に囲まれているし、とりすましている女よりも社会（*la société*）にとってはずっと必要で、しかも社会（*la société*）に尽くすために、社会（*cette société*）が彼女たちから不正にも取り上げようとしている敬意を犠牲にする勇氣をもっているの。娼婦という名を名誉としている女たち万歳だわ！ 彼女たちは本当に可愛くて、実のところ唯一の哲学者（*philosophes*）なのよ！ わたしはね、十二年も前から娼婦のように振る舞おうと努めているものだから、娼婦と言われてもそれに気を悪くするどころか、楽しんでいると断言できるわ。そればかりじゃないのよ、わたし誰かとやっているときに、娼婦って呼ばれるのが好きなの。こんな風に罵られるとわたしの頭に火がつくのよ¹¹⁾。

娼婦の一般的な説明から、娼婦を擁護し、娼婦を批判する社会に対して逆に反撃を加えるサン・タンジュ夫人の言葉は、彼女の考えが説明の言説に滑り込み、娼婦の説明から世論を攻撃する言説に巧みに変化している。サン・タンジュ夫人にとって、世論とは娼婦に敵対するものであり、娼婦を「幸福で尊敬すべき人たち」と考える彼女にも敵対するものでしかない。このようにウジェニーに説明をしながら、実はウジェニーから読者に説明の対象をスライドしながら語るこうしたパターンは、サドの語りのテクニクともいうべきもので、ここからは強く意識されている読者が読み取れる。スライドしながら語る例は

11) Sade, *Œuvres*, t. III, Pléiade, 1998, pp. 25–26. もちろん娼婦は当時においても否定的に見られていた。Cf. *Dictionnaire de Richelet*, «Prostitution»: *Dérèglement de vie. C'est un abandonnement illégitime que fait une fille ou femme de son corps à une personne, afin que cette personne avec elle des plaisirs défendus.* (人生の逸脱行為。それは、娘あるいは夫人が他の人に自分の体を委ねる不法行為であり、その目的はこの男が禁じられた快樂を女とうるためである。)

これ以外にも随所に見られるが、『閨房哲学』の前半においてドルマンセが神の存在を否定するもっとも過激なくだりに注目してみよう。

神を信じるためには、思慮分別をなくさねばならない。ある者にとっては恐怖の結果であり、またある者にとっては弱さの結果であるこの忌まわしい亡霊は、いいかねウジェニー、地上の体系にとっては無用であるばかりか、百害あって一利なしというべきだろう。[…] しかし人は (on) こう言うかもしれない、神と自然とは同じものであると。ところが、これは不条理ではないだろうか？ 創造されたものが創造者と同じであることはできないからね。時計と時計屋が同じなんてことがありえるだろうか？ しかし、とその人は (on) 続けて言うかもしれない、自然なんてない、神がすべてなのだと。これもまた愚かな話さ！ 宇宙には必ず二つのもの、つまり創造者と創造された個体があるんだ。ところで、この創造者とは何なのだろうか？ これこそ解決しなければならない唯一の難問であり、答えねばならない唯一の疑問なのだ¹²⁾。

「ウジェニー」と呼びかけているこの箇所では、ドルマンセは明らかにウジェニーを発話の対象として語っている。ところがすぐその後で、「しかし人はこう言うかもしれない、神と自然とは同じものであると。ところが、これは不条理ではないだろうか？」と、フランス語の on = 「人」を引き合いに出して反論を想定している。また、それに続く疑問文はウジェニーに向けられたものであると同時に、読者に向けられたものと解釈することができる。さらにドルマンセは続ける。「創造されたものが創造者と同じであることはできないからね。時計と時計屋が同じなんてことがありえるだろうか？ しかし、とその人は続けて言うかもしれない、自然なんてない、神がすべてなのだと。これもまた愚かな話さ！ 宇宙には必ず二つのもの、つまり創造者と創造された個体があるんだ。ところで、この創造者とは何なのだろうか？」 ここでも on = 「人」に

12) *Ibid.*, p. 28. 下線は引用者。

よる疑問を提起し、その回答は疑問文で締めくくられている。反論をする **on** = 「人」はフランス語では曖昧であり、ここではウジェニーを含む、いやもう少し踏み込んで言えば、**on** = 「人」はウジェニーと言ってもいいだろう。ドルマンセに素朴な疑問を提起する対話者、それが「人」=ウジェニーであり、両者は一体のものである。ところがドルマンセの言葉は語りの対象の質に微かな変化を起こしている。

君の (**votre**) 神とかいう絵空事は、はたして何かを明らかにしたのかい？
 このことを証拠立てることができる人なんていないね。仮に僕が物質に内在する諸能力について間違った考えをしているにせよ、少なくとも僕は、自分の前にたった一つの困難をもつだけだ。君の (**votre**) 神を僕にもちだして、君は (**vous**) どうしようというんだい？ 君は (**vous**) 僕に困難をもう一つ与えるだけじゃないか。僕に理解できないものがあるからといって、なおさら理解できないものをもちだして、どうして君は (**vous**) それを認めろっていうんだい？ 僕が君の (**votre**) 恐ろしい神を吟味したり…思い描いたりするのにも、やはりキリスト教の教義の助けを借りなければならぬとでもいうのかい？¹³⁾

ここでは **vous** あるいは **votre** という人称代名詞はウジェニーを指しているのであるが、同じドルマンセの言葉でも、ドルマンセに対立するものとして表れている。サドのエクリチュールは、『閨房哲学』と同じ作品系列では、物語の進展に伴ってより過激になるという特徴をもつが、ここではほんの数行の中で、教化の対象としてのうぶなウジェニーからドルマンセに対立するウジェニーへと深刻な変化が生じている。おまけに、この変化にウジェニー自身は何ら関与していない。ドルマンセの語りの中で、ドルマンセの思考の展開によって変化しているのである。まさにこの点に「暗黙の読者」が読み取れる。つまり、ドルマンセが語りかける対象はウジェニーから読者へと変化し、その読者

13) *Idem.*

こそがドルマンセ＝サドに対立する読者、こう言ってよければサドの「暗黙の読者」としての公衆であるだろう。この後イエスの生い立ちについてドルマンセは語ることになるのだが、神について語るリベルタンの過激さは漸進することからもわかるように、「暗黙の読者」の意識と対立すればするほど、また、公衆との考えが隔たれば隔たるほどより過激になることがわかる。おまけに、この箇所において、反論する on＝「人」は当然のことながら、「暗黙の読者」であって、サドがいかに強く読者を意識していたかをよく物語っていると言える。教化の対象からサドに対立する公衆への変化を、この箇所はよく示している。また、こうした反論の想定は『閨房哲学』の中では一貫していて、リベルタンたちの語りの特徴とも言えるものである。それでは、『閨房哲学』におけるリベルタンたちは、いったい誰からの反論を想定しているのだろうか。その一例として、サン・タンジュ夫人がウジェニーに対して不倫を話題にしながら、反論を想定して、それに反駁する箇所を見てみることにしよう。

不倫だって、男たちが一つの罪と見なし、わたしたち女の命を奪うことで罰しようとしたけれど、その不倫もね、いいことウジェニー、自然における一つの権利の獲得でしかないし、暴君である世の男どもがどんな気まぐれを起こそうとも、われわれを自然の手から奪い取るなんて決してできないものなのよ。[…] あなたは (vous) どんな非難をわたしに言えるのかしら？ 夫だってそれ [不倫] を楽しめばいいじゃないの。…でもあなたは (vous) 夫を欺いた、こうした欺瞞は耐えがたいものだ。こんなことを言うのだったら、わたしこう答えるわ。…いいえ、それはお互いさまよ、それだけのことですわ。わたしの方こそ、最初に騙されて無理やり結婚させられたんじゃないの。だからそれに復讐するだけよ、これ以上分りやすい話ってあるかしら…とね。しかしあなたの夫の名誉は実際に傷ついたじゃない…というかもしれない。それに対しては、こんな風に言うわ。…それこそ偏見というものよ！ わたしの放蕩は夫とは何の関係もないし、わたしの過ちはあくまでわたしだけのことですからね。そもそも夫

の名誉を傷つけるという考えは、百年前なら通用したかもしれないけれど、現在そんな妄想にとらわれている人はまずいないわ。わたしが夫の放蕩で名誉を汚されないのと同様に、わたしの夫もわたしの放蕩で名誉を汚されたりしていないのよ。わたしがたとえ世界中の男とやったとしても、彼にかすり傷一つ負わせたことにもならないわ！¹⁴⁾

ここでもウジェニーに答えるという形式にはなっているが、最初の **vous** はウジェニーであり、そのすぐ後の **vous** はサン・タンジュ夫人を示していて、きわめて曖昧な **vous** の使い方である。また、反論の発話者も「男たち」、「夫たち」からしだいに曖昧になり、誰が反論を述べているのかはテキストを読み進むにつれてわからなくなってくる。つまり、サン・タンジュ夫人の語りは、ウジェニーからしだいに「暗黙の読者」へと反論の想定対象が移行していく。こうした移行は作者であるサドがいかに読者を意識していたかを強く物語るものであると同時に、反論を想定しそれに反撃を加えることで自分の考えを有利に展開しようとする語りのテクニクと言えるものである。こうした反論の想定が『閨房哲学』では随所に見られることから、いかにサドが読者＝世論に敏感であったかを示すものと言えるだろう。

ところで面白いことに、『閨房哲学』ではテキストが読者について語るくだりがある。テキスト内部で、どのように語られるのかをまずは見てみよう。

Ⅱ. テキストが語る読者

『閨房哲学』に挿入されたパンフレット「フランス人よ、共和主義者になりたければあと一息だ」の中で、語り手が自分の語りかける対象、つまり読者について次のように言及する箇所がある。

また、このような内容の文書を書けばそう思われても仕方がないかもしれ

14) *Ibid.*, pp. 39-41.

ないが、わたしの文書には悪人の魂のなかにある自責の念を弱める危険があるだとか、わたしの道徳的寛大さはこれらの悪人の犯罪的傾向を煽り立てる悪のなかでも一番の悪だなどと言わないでもらいたい。何らそのような邪悪な意図をもっていないことを、ここにわたしははっきりと言明する。わたしが述べようとしているのは、物心がついて以来、自分のものとなった思想、そしてまた、暴君どものおぞましい専制政治と何世紀にもわたって対立してきた思想である。したがって、このような偉大な思想にふれて、墮落するような輩には用がない！ 哲学的見解（*opinions philosophiques*）の中にただ悪しか見出すことができず、何にふれても墮落しやすい輩などどうなろうと関係ないのだ！ そのような輩は、おそらくセネカやシャロンの本を読んでさえ、毒されるに違いない。わたしが語りかけているのはそのような輩に対してではなく、わたしの言うことを理解できる人々に対してだけである。彼らのみが、墮落の危険もなく、わたしの文を読んでくれることだろう¹⁵⁾。

語り手は、「哲学的見解の中にただ悪しか見出すことができず、何にふれても墮落しやすい輩などどうなろうと関係ないのだ！」と述べて、自分の主張を理解する読者のみに語りかけていることを強調している。読者を意識するサドにあって、自分の主張が公衆には受け入れがたいものであることは十分理解していたはずだ。しかし、このパンフレットを「哲学的見解」として規定する作者は、公衆の中の哲学を理解できる者（ただしそれは自分の哲学を理解できるものでしかない）を読者と考えている。ここには哲学的（*philosophiques*）という語によって自分の考えを読者に普遍化しようとする作者の意志が読み取れる。

あるいはまた、リベルタンのドルマンセは別の箇所読者について次のように語っている。

15) *Ibid.*, pp. 125–126.

自分の感覚が分からない多くの愚か者には、僕の主張する理論なんて理解できないということを、僕はよく知っているよ。でも、こんな馬鹿な連中は僕にはどうでもいいんだ。僕が語りかけているのは、こんな出来の悪い連中じゃないんだから。女を賛美するつまらない連中など、生意気な女の足下で、甘いささやきを期待して幸せにひたっていればいいんだ。しかも、彼らが支配すべき女の奴隷に成り下がるような連中は、鉄鎖をもたす女の身体に身を委ねていればいい。自然はこの鉄鎖で他人を苦しめる権利を彼らに与えているのにだよ。このような獣のような連中は、自分の品位を落とす卑しい生活を細々と送っていればいいんだ。われわれが彼らを説得することはどうせ無駄なんだから。しかし、彼らが理解できないからといって、そのことを悪く言うのはやめてもらいたいね。彼らに分かってもらいたいのは、力強い魂と自由な想像力だけに訴えて、このような問題について自分の原理を打ち立てたいと思う者こそが、つまり奥さんや僕がそうだけれど、いつだってこうした話を聴くのに値する者だし、法律を定め、授業を行うのにふさわしい者だということなんだ！…¹⁶⁾

ドルマンセが語りかけているのは、彼の主張を理解できる者であって、理解できない馬鹿な連中は語りの対象から外されることになる。ここには議論が介在する余地はなく、絶対的正当性をもつドルマンセの考えを受け入れる者だけが話を聞くに値する者、つまり読者となりうるというわけだ。しかし、結局はドルマンセも認めているように、理解できる者とはドルマンセやサン・タンジュ夫人のようなリベルタンでしかありえない。

注意すべきは、ここではドルマンセもサン・タンジュ夫人もサドの分身であって、サドの考えの代弁者としての役割を担っているということである。というのも、『閨房哲学』は **dialogues** という表題がついているにもかかわらず、テキストの構造は弁証法的な構造ではなく、ある一つの決められた方向へ登場人物みんなが協力しながら進んでいくという構造になっているからだ。その決

16) *Ibid.*, p. 159.

められた方向こそが、サドが意図する方向であって、サドは登場人物のリベルタンたちを背後から操る神の立場にいる。では、サドは自分の考えを自分以外の読者は理解できないと考えていたのだろうか？もし自分以外の読者には理解不可能だと考えるなら、テキストを生み出す必要はないのであって、沈黙と暴力に訴えればいいはずである。したがって、理解できるのはリベルタンだけだと主張しながらも、テキストは作者の「暗黙の読者」に向けられている。この点に関しては、先のパンフレットの引用に見られるように、語り手が反論を想定しながら自分の主張を展開していることから分かる。その主張からは読者を批判し、教化しようとする意志が読み取れるからだ。当然のことながら、自分の主張を理解してくれる読者には本来わざわざ説明する必要はないのであり、作者が意識していたターゲットとしての読者はドルマンセ、つまりサドと対立する読者でなければならない。このような教化しようとする意志をもっともよく表したものが、「フランス人よ、共和主義者になりたければあと一息だ」というパンフレットで、ここには教化の意志しかない。以前に、この「フランス人よ」における語り手 *je/nous* と教化の対象としての *vous* との距離を調べたことがあるが、その中で分かったのは、*vous* は *je* の論理の展開に応じて教化の対象から逸脱し、*nous* と一体化して用いられる箇所があるということである¹⁷⁾。こうした距離の変化が何を表しているのかというと、サドは常に自分の論理の展開が有利になるように *vous* を取り込んでいるということであった。したがって、パンフレット「フランス人よ、共和主義者になりたければあと一息だ」には、論理としての言葉しかなく、性行為の場がないのは当然である。読者を教化するのに必要なのは論理を作り出す言葉であり、「黙説語法」で表される性行為の場は必要ないからだ。では、繰り返される性行為の場はどのような読者を想定していたのだろうか？

17) «Révolution française et érotisme vus à travers les textes politiques de Sade», *Études de Langue et Littérature Françaises*, No. 62, 日本フランス語フランス文学会, 1993, pp. 16-28を参照のこと。

Ⅲ．性行為の場の読者

性行為の場の一例として、ドルマンセがサン・タンジュ夫人に説明する箇所から見てみることにしよう。それはサン・タンジュ夫人の次のような言葉を受けてドルマンセが語る場面である。引用が憚られる箇所ではあるがサドのエクリチュールに触れるためにあえて引用する。

サン・タンジュ夫人：こうした乱交にも、もう少し秩序をもちましょ
よ。自分を失う恥すべき行為の最中にも、秩序は必要ですわ。

ドルマンセ：実に簡単なことだ。この可愛い娘にできるかぎりの快楽を与えながら、僕が射精することが主な目的なんだ。僕の一物を彼女のお尻のなかに入れるから、その間に奥さんは（vous）、奥さんの（votre）両腕に身を任せるこの娘を精一杯手で刺激してやってほしい。この姿勢だと、この娘の方もあなたに（vous）お返しをすることができるんだ。つまり、お互いに（vous）愛撫し合えるというわけだ。この娘のお尻でしばらく楽しんだ後で、やり方を変えるところでしょう。今度は僕は奥さんの（vous）お尻を楽しむことにする。ウジェニーは、奥さんの（vous）上になって、奥さんの（votre）頭の上で両足を開けるんだ。僕がクリトリスを舐めれるようにね。こうして、この娘は二回目の絶頂を味わうことになるだろう。その後、僕は再びウジェニーのお尻を楽しむから、奥さんは（vous）彼女がクリトリスを差し出したように、あなたの（votre）お尻を僕の前に出してほしい。要するに、彼女がさっきしたように、奥さんの（vos）両足を彼女の頭の上で開くんだ。そして、僕は奥さんの（votre）お尻の穴を舐める、彼女のあそこを舐めたようにだ。こうして、奥さんも（vous）絶頂に達するだろう。その間、僕は僕で、この可愛い初心者のきれいな身体を抱き締めながら、手でクリトリスを刺激して、彼女も同じようにいかせてやるんだ¹⁸⁾。

18) *Ibid.*, p. 56.

ドルマンセの説明の対象はサン・タンジュ夫人であり、彼女の役割がドルマンセによって指示されている。当然のことながら、この箇所の主語人称代名詞の *vous* であれ、目的補語人称代名詞の *vous* であれ、所有形容詞の *votre, vos* であれ、これらは「奥さん」あるいは「あなた」と訳したサン・タンジュ夫人を指し示している。しかし、ドルマンセの指示はサン・タンジュ夫人に向けられてはいるが、このような詳細な指示が明らかにしているのは、その背後にいる「暗黙の読者」を性行為の場へ誘うことではないだろうか。さらに注目すべきは、この場における言語の機能であろう。言語によって指示されているとはいえ、その言語は論理に基づくものではないし、論理の整合性を示すものでもない。ここで必要なのは見せるための言語、見せるための描写だ。

われわれがまず考えなければならないのは、性行為の描写箇所は、読者を教化する必要があるという点である。物語の進展に伴い性行為がしだいにエスカレートするサドのエクリチュールについてはすでに触れたが、ドルマンセ、サン・タンジュ夫人、ミルヴェル騎士、ウジェニー、そして庭師オーギュスタンが挿入可能なあらゆる穴を利用しながら性行為を繰り返す場面は、教化の対象としての読者に向けられたものではない。というのも、そこには教化するものがないからだ。あるのは見せるということだけだ。われわれ読者は、性行為の現場に立ち会い、彼らの乱交の目撃者になる。のぞき見る読者は、リベルタンの共犯者になり、リベルタンの実践を体験することになる。では、サドは性行為の場面を描きながら、どのような読者を想定していたのだろうか？

性行為の場では、ドルマンセが他の者に命令を下し、その命令に従ってみんなは役割を実行する。ここではドルマンセはみんなを動かす全能の神として振る舞うことになり、この神の位置が他ならぬサドの位置と言える。そこは途方もない欲望が満たされる位置であり、幻想が記述行為の中で現実と錯覚させられる瞬間ではないかと想像できる。このように考えると、サドが想定する読者は不在であるか、あるいはむしろ「暗黙の読者」はサド自身ではないかと考えられる。『閨房哲学』の中で何度も繰り返される性行為の場は、サドが自分自身の欲望を満たすため、いわば自慰行為としてのエクリチュールではないかと

思われるのである。ドルマンセはいみじくも引用箇所冒頭で「この可愛い娘にできるかぎりの快楽を与えながら、僕が射精することが主な目的なんだ。」と語っているが、この場を描きながら欲望を満たしていたのはサド自身ではないかと考えられるのである。

「暗黙の読者」がサド自身ではないかという論拠は、性行為のエクリチュールが、最上級表現に充ち満ちていること、その場がますます過激になっていくことから、まさに記述行為の瞬間に快楽を味わう「暗黙の作者」サドを想像させるからだ。最上級表現とは、性行為の場でもっとも大きなもの（一物、張り形など）、もっとも美しいものや魅力的なもの（ウジェニーやサン・タンジュ夫人の肉体など）を場面において最上のものとして表現するサドのエクリチュールである。

また、ますます過激になる点は、性行為の場が最初はドルマンセ、サン・タンジュ夫人、ウジェニーによって始められ、それにミルヴェル騎士、オーギュスタンが加わり、しかも張り形や鞭といった道具の使用によりエスカレートし、最後はウジェニーの母親であるミスティヴァル夫人のありとあらゆる所を針で縫いつけるという漸進的な残虐性をもつ物語の展開にはっきりと表れている。それは数字に固着するサドの特徴の中で顕著に見られるもので、たとえば「第一の対話」で登場するドルマンセの一物の周りは16センチであるのに対し、「第五の対話」で登場するオーギュスタンのものは23センチと漸増する数値が顕示している。とりわけ強調したいのは、ミスティヴァル夫人を梅毒で汚し、針で滅多突きにするという結末は、ミスティヴァル夫人がサドの監禁の原因である義母のモントルーユ夫人であり、彼女を血祭りにあげる喜びをサドはこのテキストを書きながら味わっていたのではないかと考えられる点だ。つまり、記述行為そのものが作者に幻想をもたらし、また欲望を満たすことになり、それゆえに性行為の場の「暗黙の読者」はサド自身ではないかと考えられるのである。

この点に関しては、澁澤龍彦も『サド侯爵の生涯』の中で、ルーセ嬢に宛てた卑猥な手紙に触れながら「サドは、手紙の中に猥語や卑語を用いることを少

しも憚らなかった。妻に対しても、しかり。この態度は、彼にとって言葉が自慰行為にはかならなかつた、ということを示す¹⁹⁾と述べて、サドにとって言葉がオナニズムとして機能していることを指摘している。このように、『閨房哲学』には、さまざまな形で書き込まれているサドの欲望が読み取れるのである。

Ⅳ. デイドロの「暗黙の読者」との比較

サドの「暗黙の読者」との違いを明らかにするために、ここではデイドロの『運命論者ジャックとその主人』（以下『ジャック』と略す）に見られる「暗黙の読者」と比べてみることにしよう。デイドロは『ジャック』で、しばしば「暗黙の読者」を登場させて、まるで登場人物であるかのように「読者」を描いている。それゆえにこの作品における「読者」の役割は重要である。それはまず物語の冒頭に見られる。というのも、物語は「彼らはどんなふうに出会ったのですか？」という「読者」の質問から始まるからだ。それに対して、「語り手」は「みんなと同じように、ほんの偶然に。」と答えて、「読者」と「語り手」が対話をする奇抜な構成になっている。さらには主人とジャックの対話がそれに続き、そこにまた「語り手」が介入し、「読者」もまた質問をする。『ジャック』の構成の問題が本論の主旨ではないので、あまり深入りすることは控えたいが、「読者」の位置を確認しておくことは最低限必要である。では『ジャック』の中で「読者」はどのような役割を担っているのだろうか。『閨房哲学』に見られた「読者」とどのような違いがあるのだろうか。次の引用は『ジャック』の中でも「猥褻賛美」を述べたよく知られた箇所であるが、ここでも「読者」が登場し、「語り手」は「読者」と対峙することになる。

一体どうして、分別もあり、身持ちもよくて、哲学者であることを鼻にかけているような人が、こんな卑猥な作り話をぺらぺらしゃべって面白がっていられるのですか？ —読者のあなた、まず第一に、これは作り話

19) 澁澤龍彦『サド公爵の生涯』、中公文庫、中央公論社、p. 187.

ではなくて実話です。だから私がジャックの愚行をどれほど書きつらねようと、ティベリウス帝の放蕩を伝えるスエトニウスよりも罪深いとは思えません。私の罪など彼よりは軽いのではないかと思えるほどです。でもあなたは（vous）スエトニウスを読んでも、なんの非難もなさらない。[…]

あなたが（vous）潔癖無垢であるのなら、私の話をお読みにならなければいいのですし、あなたが（vous）すでに堕落腐敗しているのなら、私の話を読んでもなんの悪影響もないはず。こうして私の申しあげていることにもご満足いただけないのでしたら、ジャン＝パティスト・ルソーの序文をごらんください。私を擁護する文章がありますから。『乙女』を書いたからといって、ヴォルテールをとがめる人があなた方（vous）のなかにいますか？ いませんね。とすると、あなたは（vous）人間の行為を二つ異なった天秤で量っているということになりますね？ でも、とあなたは（vous）おっしゃる。ヴォルテールの『乙女』は傑作ですよ。—それは残念ですね。あんなものがこの先もますます読まれるんですから。[…]

卑しい偽善者どもには私をほっといてほしいのです。荷鞍をはずした驢馬みたいに、ヤッてもらってもかまいません。ただ、私が「ヤル」という言葉を使うのは認めてもらいたいのです。行為はあなたにまかせますから、私には言葉をまかせてください。「殺す」とか、「盗む」とか、「裏切る」とかといった言葉は平気で口にするくせに、この言葉には口ごもるわけですね！ 不純なことは言葉にすることが少なければ少ないほど、あなたの（vous）頭の中には残らないというわけですか？ 生殖の行為はかくも自然で、かくも必要で、かくも正しいというのに、あなたは（vous）どうしてその記号を自分の会話から排除しようとしたり、自分の口や、眼や、耳がその記号で汚されることになるなどと考えるのですか？ 使われることも、書かれることも、口にされることももっとも稀な表現が、もっともよく、もっとも広く知れわたっているというわけだ。だってそうでしょう。「ヤル」という言葉は、「パン」という言葉と同じくらいなじみ深いものではありませんか？ この言葉は年齢に関係なく、どんな方言にも

見出され、ありとあらゆる言語のうちに数え切れないほどの類義語をもっている。声も形もなく、表現されることもないにもかかわらず、誰の心にも刻みこまれているというのに、それをもっともよく実践する性が、それについてもっとも口をつぐむならわしなのです。私にはまたあなたの声（vous）聞こえてきます。あなたは（vous）叫んでいらっしゃいますね。ふん、面の皮の厚いやつだ！ ふん、恥知らずめが！ ふん、詭弁なんかまっぴらだ！…それなら勇気を出して、あなたが後生大事に抱かえておられるあの偉大な作者のことを侮辱してごらんなさい。ここで私が申しあげていることはその人の翻案にすぎないのでから。放縦な文体がほとんど書き手の純潔の保証のようにも思われる、その作者の名はモンテーニュ。「我が頁ハ何レモ放縦ナリ。然ルニ我が人生ハ潔シ。」—²⁰⁾

「語り手」の考えは「暗黙の作者」の考えであり、それはデイドロの考えでもあるだろう。デイドロのエクリチュールが性的コノテーションを含む点についてはこれまでもしばしば指摘されているが、その論拠としてこの箇所を読み取ることもできる。「生殖の行為はかくも自然で、かくも必要で、かくも正しいというのに、あなたは（vous）どうしてその記号を自分の会話から排除しようとしたり、自分の口や、眼や、耳がその記号で汚されることになるなどと考えるのですか？ 使われることも、書かれることも、口にされることももっとも稀な表現が、もっともよく、もっとも広く知れわたっているというわけだ。だってそうでしょう。「ヤル」という言葉は、「パン」という言葉と同じくらいなじみ深いものではありませんか？」という主張は、モンテーニュからすっかり借用した表現ではあるけれど、性を語ることに向けられた当時の社会通念に対するデイドロの意識をよく表した社会批判の文脈として読むことができる。

- 20) Denis Diderot, *Œuvres complètes*, t. XXIII, DPV, Hermann, 1981, pp. 229–231. 訳出にあたっては、デイドロ『運命論者ジャックとその主人』、王寺賢太・田口卓臣訳、白水社、2006、pp. 258–260を参考にさせていただいたが、一部変更した箇所がある。この「猥褻賛美」の箇所の主張は、デイドロも最後に述べているように、モンテーニュの『エッセー』、第3巻、第5章の主張を敷き写したものである。

というのも、ここで「あなた」=vousとして批判されるのが「読者」であって、それは「公衆」の意識であり、「社会」の意識でもあるからだ。その点ではこれまで見てきたサドの「暗黙の読者」と同様に、ディドロも読者である「あなた」=vousを強く意識しながら語りかけている。ではサドとディドロの「あなた」は同じものだろうか。

形式的にはディドロの「読者」は、『ジャック』に現れる登場人物であり、ディドロが作り出した「暗黙の読者」の意識を表わしている。テキストを読む「現実の読者」は、「語り手」と「読者」の意識の間に置かれることになる。ディドロはこの箇所を、「一体どうして、分別もあり、身持ちもよくて、哲学者であることを鼻にかけているような人が、こんな卑猥な作り話を面白がってしゃべっていられるのですか？」という「読者」の質問から始めている。それに対して「語り手」は、「でもあなたは(vous) スエトニウスを読んでも、なんの非難もなさない。どうして、カトウルスや、マルティアリスや、ホラティウスや、ユヴェナリスや、ペトロニウスや、ラ・フォンテーヌや、ほかかにもいくらでもいる風刺家たちに眉をひそめたりしないのですか？ どうしてあのストア派のセネカに、あなたの奴隷が凹面鏡の前でくりひろげる乱痴気騒ぎなど、われわれになんの必要があるのか、とおっしゃらないのです？ どうして死者たちにだけはそう寛大なのですか？²¹⁾」と逆に質問を返す。こうした「読者」と「語り手」の対話の間にわれわれ「現実の読者」は置かれることになり、猥褻とは何かを考えさせる「思考誘導装置」とでも呼ぶべき力をディドロのテキストはもっている。ディドロが好んだ対話形式は対立する考えを「現実の読者」に提示することで、思考させる形式と言える。もちろん「語り手」としての「暗黙の作者」の意識を読み取ることはこの箇所は難しいことではない。しかし、「語り手」は自分の考えを押し付けないし、解答を与えるわけでもない。つまり、「読者」は批判の対象であるが、教化の対象ではない。それに対して、サドの登場人物は自分の考えを押し付ける。教化しようとする。『閨房哲学』ではリバルタンたちが協力し合いながら物語を一つの方向に導く力がある。その

21) *Ibid.*, p. 229.

方向とはサドの欲望の方向だ。

以上のことから、サドにおいてもディドロにおいても、読者の導き方に違いがあれ、読者を強く意識していたことがわかる。では二人はなぜこれほどまでに読者＝公衆を意識していたのだろうか。その背景には読者＝公衆の成長があることは疑いをえない。二人が訴えかけるのは読者に対してであり、読者との連帯の可能性を見出しているように思われる。そこには考えを共有できるという意識があり、その意識を支えているのは「暗黙の作者」と「暗黙の読者」のテキストを介した同一化意識ではないだろうか。

V. 結論

さて、話を『閨房哲学』に戻そう。サドはどのような読者を想定し、その読者をどのようにとらえていたのか。結論として、『閨房哲学』における読者は二つ考えられる。一つは、教化の対象としての読者であり、もう一つは、やや突飛な結論と思われるかもしれないが、サド自身という読者である。サドは「読者を楽しませながら教育する」と「小説論」の中で書いているが、性行為の記述を楽しんでいたのは実はサド自身で、まさにこうした自慰行為にサドにおける読者の特殊性が読み取れる。しかしながら、読者に関する分析は、さらに重要な問題を提起する。それは、われわれがサドの作品を二系列の作品群に分けて考えようとする背景に、サドの読者戦略が隠されているのではないかという問題だ。『閨房哲学』系の作品群では、サドは読者を教化の対象として、いやむしろサドに敵対する読者として措定しているのに対し、『恋の罪』系では、読者はサドの文学的実践を理解できる対象として措定されているのではないか。それは言い換えると、『閨房哲学』系では対立する *vous* が中心であるのに、『恋の罪』系では *nous* に近い読者とも言えるだろう。この問題を考えるにあたって、これまではテキストの内部における読者を見てきたが、テキストの外にも目を向けてみることにしよう²²⁾。

22) 弁護士 Reynaud 宛の1791年6月12日付けの手紙に、「現在私の小説が印刷中ですが、

すでに指摘したように、サドもディドロも読者を強く意識しながらテキストを書いていることが、18世紀における公衆の台頭を裏付けている。とりわけサドにおいては、「自分の欲望がすべてである」と主張しながらも、「暗黙の読者」＝公衆の意識に引きずられている。ここで問題になる公衆＝読者の中身は、サドにしろ、ディドロにしろ大きく異なるものではないだろう。それは水林が精緻に分析しているように、当時台頭してきた公衆とは、「フランス語による事物の広範な普及を背景に、読書と議論を通じて、「理性を批判的に使用する能力」（ハーバーマス）を持つ²³⁾」人々の集団であり、その集団が「君主権力に対抗しうるほどに大きな力を持ち始めた²⁴⁾」のが18世紀後半と言える。その中でサドはとりわけ読者に自分の作品を認めてもらいたかったのではないか、読者に自分の文学を認めてもらいたい願望が強かったのではないか。しかし、それとは逆に、いやそれだからこそ、自分の作品を認めてくれない世論、また時流に乗った売文作家を恨んでいた節がある。

作家というものはその職業上、しかじかの意見に媚びへつらわなければならないのであろうか？ 作家は、個人的な意見を述べるのではなく、自分の才能と心のふたつを頼りに、それらが命じるところに従って書かなければならない。だとすれば、作家が万人から好かれるなどということはありえない。むしろこう言うべきだろう。「流行におもねり、支配的な党派のご機嫌をうかがって、自然から授かったエネルギーを捨てて、提灯持ちばかりやっている、卑しいごますり作家どもに災いあれ」。世論の馬鹿げた

その小説（『ジュスティヌまたは美德の不幸』）はあまりにも不道徳な本ですからあなたのように信心深く上品な人に送ることができません」と述べ、また、『哲学小説』（『アリーヌとヴァルクールまたは哲学小説』のことであろう）を近いうちに間違いなくお送りいたします」と述べていることから、作品の受容対象を分けて考えていたものと思われる。Cf. Alice M. Laborde, *Correspondances du Marquis de Sade et de ses proches enrichies de documents notes et commentaires*, t. XXII Éditions Slatkine, 1996, p. 50.

23) 水林, *op. cit.*, p. 45.

24) *Idem.*

潮流が自分の生きている世紀を泥沼に引きずりこむなどということはしょっちゅうなのに、あのように自説を時流に合わせて曲げている哀れな輩は、世紀を泥沼から引き上げる勇氣など決して持たないだろう²⁵⁾。

ここではサドは革命期の新聞「デバ」の論者に批判を加えているのだが、サドがなぜこれほど怒っているのかというと「作品を読んでみても敬意を持ってない作家に災いあれ…われわれは何よりもまず、作家のうちに誠実な人間を求めべきである…²⁶⁾」と「デバ」紙の論者が書いたことによる。一見当たり前の主張が、サドには許せなかった。「敬意というものが、それこそ純粹に、われわれ作家の意見に対する感情のひとつにはかならず、断じて、その意見を持っている人間に対する感情でないことを知らないのであろうか²⁷⁾」とサドは述べて、「敬意」という表現に過剰とも思える反応振りを示している。また、サドは「臆面もなくこのようなことを言う人間は、敬意というものが、それこそ純粹に、われわれ作家の意見に対する感情のひとつにはかならず、断じて、その意見を持っている人間に対する感情でないことを知らないのであろうか²⁸⁾」と述べて、「デバ」紙の論者が「暗黙の作者」と「現実の作者」を混同していることに対して批判している。こうした批判は、彼が「暗黙の作者」と「現実の作者」を厳密に分けて考えている文学観がうかがえて興味深い。さらにサドは次のようにも述べている。「いつの時代でも、この手合いの不愉快なへぼ文士どもが、身勝手にも、自分が肩を並べられそうもない人間を、自分と同列に引き下げようとしてやっきになることは知れたことだ²⁹⁾」と。彼には文学作家としての自負があり、それは時流に合わせる「ごますり作家」と一線を画する

25) *Notes littéraires, Œuvres complètes du Marquis de Sade*, t. XI, Société Nouvelle des Éditions Pauvert, 1991, p. 20. 訳出に際しては、マルキ・ド・サド「文学的覚書」、『ガンジユ侯爵夫人』、サド全集第十巻、橋本到訳、白水社、1995を参考にさせていただいたが、一部変更した箇所がある。

26) *Idem.*

27) *Idem.*

28) *Idem.*

29) *Idem.*

ものというわけだ。

また、サドは「誠実」という言葉にも敏感に反応する。「あの礼節を弁えない連中が言うにことかいて、作家のうちに誠実な人物を探し求めなければならないのだという。私が作家に求めるのは天才である。品行や性格はどうでもいい。なぜなら、私が共にありたいと思っているのは、作家その人ではなく、その作品だからであり、作家が私にもたらしめるもののうちで私にとって必要なのは、真実のみだからだ。[...] デイドロ、ルソー、ダランベールは、社交にかけてはほとんどお粗末と言っていていいくらいだったようだが、彼らの書いたものは、「デバ」紙の紳士方の恥知らずな攻撃を受けたところで、その崇高さに変わりはない……³⁰⁾」。ここでも作家と作品をわけて考える自己の文学観を開陳し、また彼が引用する三人の作家たちを評価するとともに、自らをこれら三人と同列に加わる作家とみなしている点からもその自負がうかがえる。読者に自らの文学を認めてもらいたい願望を一方では抱き、他方では自分の作品を認めようとしない読者を敵対するものとみなすことによって、サドは読者に対して矛盾する二つの欲望を抱えていたのではないかと考えられる。それが二系列の作品群として現れたのではないだろうか。

それではこの二系列はまったく違ったものののだろうか。剥き出しの性が物語の進展に伴ってエスカレートする『閨房哲学』系の性表現の過激さは『恋の罪』系には顕著でないにしても、その主張に本質的な違いが見られるわけではない。同じ思想が底流には流れているけれど、その現れが違うだけではないか。同じ思想とは、神の否定へと向かう無神論であり、サドはそれを美德が悪徳によって打ち負かされることで表現しようとしたのではないかと考えられる。文学的には美德は人間の心の一形態に過ぎず、小説家が目指すべきは心のすべてを描き出すことであると「小説論」の中で述べているように³¹⁾、サドは自らの

30) *Ibid.*, p. 263.

31) 「小説というジャンルで仕事をするとき、何より把握しなければならないのは自然であり、また自然の作品中もっとも奇妙なものである人間の心なのであって、美德などでは全くないのである。なぜなら、美德などというものは、どんなに美しかり

文学の基底である無神論を揺るがすことなく、周到な読者戦略によって自らの主張を書き分けていたと考えられるのである。

うと必要であろうと、小説家が深い研究を必要とする、あの不思議な人間の心の一形態に過ぎないからである。そして小説は、この心の忠実な鏡なのであるから、心のすべての陰影を描き出すことが、ぜひとも必要なのである。」(*Idée sur les romans, op. cit.*, p. 71)

Le texte de Sade et son lecteur

— Le cas de *La Philosophie dans le boudoir* —

SEKITANI Kazuhiko

Qu'est ce que *le lecteur* pour Sade? Il est intéressant d'envisager cette question, car pour le philosophe le désir occupant la place suprême, le lecteur devrait n'avoir aucune importance. Or le texte de Sade fait preuve, bien au contraire, d'un grand intérêt pour le lecteur. Cet article a donc pour objet de réfléchir sur le lecteur chez Sade en considérant notamment le cas de *La Philosophie dans le boudoir*.

Tout d'abord dans quelle partie du texte sadien trouvons-nous «le lecteur implicite»? Nous pouvons le trouver par exemple dans les écrits de Sade tels que ceux qui expliquent son désir sans logique avec logique, et qui critiquent le sens commun du lecteur en critiquant celui du public. Quand on pense à qui il adresse ses critiques, c'est au lecteur qu'il faut penser, car c'est contre lui qu'il dirige ses attaques. Le lecteur est donc l'objet de son entreprise d'édification.

Le texte de Sade met également en scène un lecteur imaginaire qui fait une critique, imaginaire donc elle aussi, de sa pensée. Cette mise en scène montre que Sade tient grandement compte de l'opinion publique, qui s'exprime à travers cette critique, et qu'il s'acharne à la réfuter et à la mettre en pièce, prenant ainsi un avantage devant «les lecteurs réels». Etant donné que l'on rencontre à plusieurs reprises ces critiques, disons virtuelles du lecteur, cela nous conduit d'autant plus à penser cette

question du lecteur dans le texte sadien.

Les personnages libertins de *La Philosophie dans le boudoir* disent que leurs pensées ne seront pas comprises par le lecteur. Si cela était vrai, cela n'aurait pas de sens d'écrire ce texte et il vaudrait mieux se taire ou faire appel à la violence. Il est donc clair que le texte est dirigé vers un «lecteur implicite».

Mais les pages qui mettent en scène l'acte sexuel sont d'une nature différente. Le lecteur dans ce cas n'est pas un objet d'édification, mais celui à qui l'auteur fait voir la scène. Le lecteur invité à assister à la scène érotique devient alors un complice des libertins. Il faut ici faire attention à l'utilisation de la langue qui a pour but d'exhiber la scène et non d'établir une logique. La position de Dolmencé est aussi celle de Sade lui-même et enfin celle de Dieu qui, maître et metteur en scène, donne ses directives aux personnages impliqués dans ces scènes. On peut donc dire que «le lecteur implicite» est Sade en personne et que l'acte d'écrire équivaut au geste même de l'onanisme.

Pour bien comprendre «le lecteur implicite» chez Sade, nous le comparons avec celui de Diderot dans *Jacques le fataliste et son maître*. Le lecteur de Diderot dans *Jacques* est un personnage qui est présent dans le texte et qui représente l'opinion publique. Le narrateur, lui aussi un personnage, dialogue avec ce lecteur sur la question de l'obscénité. Ce narrateur critiquant l'opinion du lecteur, c'est-à-dire nous, qui lisons le texte -«les lecteurs réels»-, nous nous trouvons pris entre deux opinions, et ainsi invités à réfléchir au problème de l'obscénité. Dans le texte de Sade, l'auteur plie de force le lecteur à l'opinion des libertins et en fin de compte l'assujettit à son propre désir.

Nous en concluons que le lecteur de Sade peut occuper deux positions. L'une étant celle de l'objet à édifier, l'autre étant celle de

l'auteur lui-même : Sade, donc. Une réflexion sur la nature du lecteur chez Sade nous conduit également à réfléchir sur les relations qui s'établissent entre ces deux groupes de textes que forment les œuvres violentes d'une part et celles dans lesquelles cette violence reste en réserve de l'autre, et le lecteur. Cette tendance à fonctionner sur deux régimes d'écriture s'explique certainement par la stratégie adoptée vis-à-vis du lecteur. Une réflexion sur le lecteur conduit donc à dégager plusieurs problématiques intéressantes.